様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００２２１

研究課題名（和文）平和の造形－戦後日本における平和表象を中心に

研究課題名（英文）The Formation of Peace: Focusing on the Representation of Peace in Postwar Japan

研究代表者
奥間　政作（Okuma, Seisaku）

早稲田大学・文学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：４０７１１２１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：戦後における「平和」の造形について、沖縄に設立された慰霊碑をはじめとするモニュメントを中心に調査を行い、そうしたモニュメントと美術家の関わりについて分析を行った。ひめゆりの塔や健児の塔など、沖縄における学徒戦没者を祀る慰霊碑には沖縄県内の美術家の関与があることは既に判明しているが、本土の側で設立された慰霊碑にも、例えば広島の塔には圓鍔勝三が関わっているなど、同様な事象も確認できる。こうした慰霊碑の造形と社会的な背景について分析を行った。また、当初は南方地域の慰霊碑の調査を行う予定であったが、コロナ渦の影響でそれが叶わず、代替として戦後における原子力イメージの変遷についての研究も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は戦後「文化国家」の建設が叫ばれたなかで、美術が平和をどのように表現していたかという点に注目した研究であり、その中心的な課題は慰霊碑をはじめとするモニュメントと美術家の関わりについてである。慰霊碑をめぐる研究は社会学的な見地や歴史学的見地から多くなされているが、その造形的な面に着目した研究は少ないように思える。造形的な側面から慰霊碑へのアプローチがなされることによって、戦後の美術が果たした役割の一端が明らかになることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study examines postwar "peace" art, focusing on cenotaphs and other monuments established in Okinawa, and analyzes the relationship between such monuments and artists. While it is already known that artists in Okinawa were involved in the creation of cenotaphs for the war dead in Okinawa, such as Himeyuri Tower and Kenko Tower, similar events can be seen in cenotaphs established on the Japan proper, such as the tower in Hiroshima by Katsuzo Entsubasa. We analyzed the form and social background of these cenotaphs. In addition, we had originally planned to conduct a survey of cenotaphs in the Soiuth Sea Islands, but the coronal vortex prevented us from doing so. As an alternative, we conducted research on the evolution of the image of nuclear power in the postwar period in Japan.

研究分野：日本近代美術

キーワード：慰霊碑　戦後　美術　平和　イメージ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、日本近代美術と戦争については数多くの研究がなされているが、その対概念ともいえる「平和」と美術の繋がりについては、特に戦後の文化立国が唱えられた時期において自明とされたためか、これまで問題視されることはなかったように思える。また、本研究に先立つ「戦後の沖縄イメージの発生と展開に関する研究―戦前期との比較を通じて」（基盤研究Ｃ　研究課題/研究番号　26370178）では美術家と慰霊碑の関わりについてある程度判明したが、その詳細や歴史的文脈における分析が課題として残されていた。

２．研究の目的

沖縄戦に関する慰霊碑をはじめ、丸木位里・俊による《原爆の図》シリーズや北村西望の《平和祈念像》などは戦後における平和教育において多用されてきた。一方でこうした造形やイメージが戦後の日本美術の文脈で語られることはそう多くなかったように思える。それらの造形が一定の「目的」を果たすための作品だとされ、美術史の考察の埒外に置かれてきた可能性も指摘できるが、同様な性格を持つ戦争美術についての活発な研究動向と比較してみると「平和」を主題とする作例が造形の文脈で語られることは多くないのが現状である。そのため、本研究では慰霊碑を初めとするモニュメントや作品について調査・分析を行う。

３．研究の方法

研究の基礎的な資料については戦後に出版された美術雑誌や新聞などのデータベースを調査した。また、慰霊碑についてはそのデザインの特質と美術家との関連性や受容のありかたについて、特に沖縄で発刊された新聞資料を中心に調査を進めた。

４．研究成果

〇慰霊碑の造形

沖縄における慰霊碑は沖縄戦の激戦地であった沖縄本島南部に集中している。こうした慰霊碑についてはこれまで北村毅の『死者たちの戦後誌-沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』や福間良明の『「戦跡」の戦後誌　せめぎあう遺構とモニュメント』などによって社会学的な見地からの研究が進展している。一方で、例えばひめゆりの塔のデザインや造形ついてはあまり言及されることがなく、またひめゆりの物語に起因した各種造形物が制作され、同地に寄贈されたこともあまり知られていないといえよう。本研究ではこうした慰霊碑の成立過程から造形の変遷を追うことで、慰霊碑の造形的特質を明らかにすることとする。

〇ひめゆりの塔の建立

沖縄戦で戦没した沖縄県立第一高等女学校および沖縄師範学校女子部の学生で組織された学徒隊の戦死者をまつる慰霊碑であるひめゆりの塔は、現在の糸満市伊原の第三外科壕跡に建立されている。戦後、同地には旧真和志村の人びとが移住させられており、かつて両校が同地にあったゆかりもあり村長を務めた金城和信によって 1946 年 4 月に建立されたものである。金城の娘もひめゆり部隊に所属し同地で戦死しており、後年の回想にて「ひめゆりの言葉が何かしら彼女達に相応しいものに思えてひめゆりの塔と命名した」（『沖縄タイムス』1956 年 5 月 26 日夕刊）と述べている。しかし、「ひめゆり」という名称は戦前から両校の学生を象徴する言葉として使用されていた。1921 年には百合をモチーフにした徽章が制定され、1925 年に制定された両校共通の校歌には「白百合」や「乙姫」という歌詞が組み込まれていた。さらに、両校の校友会雑誌『白百合』『おとひめ』は 1927 年に統合され『ひめゆり』という名称になっていた。戦前に大里国民学校の校長を務め、自らの娘もひめゆり部隊で失った金城にとってこうした両校のイメージやモチーフを取り込む形で慰霊碑に「ひめゆり」の名称を付したと考えられる。金城が建てた初代のひめゆりの塔は、1946 年に設置され、縦 90cm 横 30cm 程の石柱に「ひめゆりの塔」という文字を刻んだ簡素なもので、塔というよりは碑に近い形状をもっていた。また、時をほぼ同じくして仲宗根政善による歌碑も設置され、翌年には戦没学徒の銘板が設置された。1948 年 6 月に沖縄キリスト教青年団によって高さ 3m 程の納骨堂と十字架が設置される。1949 年 9 月に雑誌『令女界』に連載された石野経一郎による小説「ひめゆりの塔」の口絵にも十字架が描かれている。口絵を描いたのは同誌の表紙を数多く手がけた蕗谷紅児で《「ひめゆりの塔」に祈る》と題されている。同図には戦没者の銘板と、納骨堂、そしてその上部に十字架が立ち、初代の塔が参拝者の正面を向くようにして納骨堂に埋め込まれている。また、本文の挿絵を担当したのは向井潤吉で、第一話のタイトルページには戦場で負傷した兵士に肩を貸して共に歩むモンペ姿の女学生を描いている。戦争画を幅広く手がけた向井にとっては、軍装や女学生のモンペ姿などを描くことはそう難しいことでなかっただろう。また、ひめゆりの引率教師の一人であった仲宗根政善によって 1951 年に出版された『沖縄の悲劇-姫百合の塔をめぐる人びとの手記』（初版）の表紙絵にも蕗谷と同じような十字架を配した慰霊碑が描かれている。また、同書の口絵に付された納骨堂の写真には同書の表紙や蕗谷の描くような納骨堂と十字架が掲載されており、口絵や表紙絵がこうした写真を基に描かれた可能性も指摘できる。

〇物語の発生と流布

沖縄戦末期には捕虜や民間人は収容所に収容されていたが、その集団のなかでひめゆり部隊にかんする物語が生み出

され、それが口伝や書写によって伝えられていたという。その代表的な作例は三瓶達司による「姫百合の塔」(『具志の青嶺-沖縄捕虜収容所の中から』所収）のような作例だと思われるが、当時の収容所内では、彼女達の勇ましい戦いぶりや雄々しく散った花として讃えるような殉国美談的な内容が多かったという。そうした状況に糸満教会の牧師であった与那城勇が危惧を抱き、1949 年 5 月に創刊した伝道雑誌『ゴスペル』に実際の生き残りの人びとを訪ねてまとめた「ひめゆりの塔」を掲載した。与那城は、沖縄を訪問中の宗教史学者比屋根安定と秘書の岩原盛勝にそれを渡し、それが石野の「ひめゆりの塔」の底本となった。石野経一郎の「ひめゆりの塔」は、本土において記録文学が隆盛をみせていた時期に『令女界』連載されたため人気を呼び 1950 年に単行本化される。その後も版を重ねるなど、ひめゆりに関する物語として広く流布したことはよく知られている。1953 年には同書や仲宗根の『沖縄の悲劇』をもとにひめゆりの物語は映画化され、商業的な成功を収めた

○「ひめゆりの塔」の造形的展開

ひめゆりの塔は 1946 年 7 月の時点では既に参道が整備され、そこには玉砂利が敷き詰められていたという（『沖縄新民報』1946 年 7 月 25 日)。かような構造はひめゆりの塔が建立当初から参拝の場として機能していたことを窺わせる。ひめゆりの塔に先だって建立された沖縄最初の慰霊碑である魂魄の塔は周辺地域の遺骨を納めたものであるが、遺骨収集や慰霊祭の実行をアメリカ軍への配慮もあって反対する人びともいたと金城和信は回想しているが（『沖縄タイムス』1956 年 5 月 26 日夕刊)、そうした配慮からアメリカ軍にとっても親しみの持てる十字架のモチーフが選定された可能性も高い。一方で、この時代には壕へ立ち入り遺留物を持ち帰る米兵の存在もあったようで、十字架のモチーフが採用されたのは米兵の壕内への立ち入りを抑止する役割を期待した可能性も指摘できる。こうした十字架はひめゆりのみならず、1951 年に建立された萬華之塔や 1956 年に建立された守魂之塔にも設置されており、同時期の慰霊碑の特徴の一つとなっている。また、この時期に撮影されたと思われる写真資料（『ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより』58 号　2016 年 11 月所収）　には納骨堂と十字架へと伸びる参道に棕櫚で出来たかと思われる鳥居が立てられており、上部には「奉納」という質素な扁額が掲げられている。また、鳥居の周りには卒塔婆のような柱が立ち並び、各種宗教が混ざり合ったような奇妙な空間となっている。

1951 年、石井みどり率いるバレエ団がひめゆりの物語を舞踊劇に仕上げ、3 月 3 日から 2 日間日比谷公会堂にて公演を行い、好評を博した。その後同バレエ団は沖縄での野外公演を行うが、これ契機として納骨堂の上部にコンクリートブロックの台座が設置され、その上部に乙女の像が設置された。像を手がけたのは沖縄の彫刻家玉那覇正吉である。同像は左膝と左肩をやや前方に出している等身大の立像であった。しかし、この像は同年の夏に沖縄を襲ったルース台風で倒壊し、その後再建されることはなく台座のみがしばらく残されることになった。

さて、本土におけるひめゆりブームが広がりをみせる中で、ひめゆりに対して本土からの造形物が寄贈・寄進を受けることもこの時期の特徴といえる。1950 年に彫刻家三木貞雄はマリア観音とひめゆりの女学生、そして慶良間諸島で戦死した学童をモチーフにした 3 体の等身大の木彫の立像を制作する予定であった。このプランは実行されることはなかったようだが、翌年の石井みどりバレエ団の沖縄公演に際しては、彫刻家田村審火による兎をかたどったレリーフがひめゆり同窓会へ寄贈されている。1952 年には鳥取の医師であり彫刻家でもあった伊藤博（宝城）による女神像がひめゆりの塔前に設置された。本像は白セメントによって制作され、顔の中央にガラス製の十字架を配した有翼の天使のような像で、胸部と腹部はくりぬかれており、腹部の空洞には幼い幼児のように見える像が配されている。この像は玉那覇が作成したブロンズ像が倒壊後、その代替として考えられていたようで、寄贈当時は納骨堂の前に設営された祠に安置されていた。また、やや時期は下るが 1955 年にはひめゆり部隊の話を聞き及んだ静岡の瓦職人鈴木啓治による石彫の乙女の像が寄進された。同像は日の丸の鉢巻を締めたモンペにセーラー服姿の石像となっている。学徒の実像とは異なるものの、同像は金城和信の強い希望で沖縄へ送られることになったようだ。また、1951 年福岡の岩田屋百貨店で開催された琉球展では、守礼門や壺屋の風景と並んでひめゆりの塔のジオラマも制作され、塔上には博多人形の職人が彫ったミニチュアが設置されていた。物語の流行と時を同じくして、ひめゆりに関する造形物も盛んに制作されるようになっていた。

初代のひめゆりの塔が建立されて 2 年後の 1950 年のひめゆりの塔附近は既に多くの参拝客で賑わうようになっていたが、訪れた参拝客によって立てられた記念の立札が多くみられ、ひめゆりの塔周辺には数百本を越えるものとなっていたという。現在でも魂魄の塔や摩文仁の健児の塔周辺には遺族や参拝者によって設置されたかとおぼしき古い石柱や地蔵像などが見受けられるが、こうした事物に対してクレームを入れたのが 1957 年に沖縄を訪問した河合寛次郎であった。彼は沖縄訪問後に「戦跡に想う」という談話記事の中で、「ひめゆりの塔、健児の塔では泣いた。しかし、あの化け者のような醜悪なしろものは困る。むしろ地下の人たちへの冒とくともいえよう。沖縄には立派な墓がある。これに葬ってこそ霊も喜ぶし、沖縄の風物にマッチすると思う。魂魄の塔でも、もっとも美の感覚から遠い碑が建ったりしているが、あれでは御霊も住心地がよくない。」と述べている（『沖縄タイムス』1957 年 4 月 6 日)。河合が述べるところの「化け者のような醜悪なしろもの」とは伊藤による女神像のことと思われる。河合の談話が掲載される 4 日前の新聞記事では既に女神像の納骨堂正面からの移動が決定され、その理由が「場所柄にふさわしくない」という意見が出たためだと新聞記事は伝える（『沖縄タイムス』1957 年 4 月 2 日)。河合が沖縄を訪問した 1957 年はちょうど戦後 13 回忌にあたる年で、納骨堂上部のコンクリートブロックの台座が撤去され、初代の塔を納骨堂から外し壕の手前に置き、白いコンクリートによって納骨堂を囲む現在の塔と同様な形態を持つものとなった。

こうした塔の改築は当初から予定されていたものか、河合の指摘によってなされたものか、あるいは両方の意見があいまって改築へと進んだのかは判然としないが、こうした変遷を経て現在の塔の形に落ち着いたようだ。また、現在の塔の右

側に配された百合のレリーフは玉那覇正吉によるものだが、岩波書店から 1958 年に出されたブックレット『沖縄-新風土記』には同レリーフは確認出来ず、翌年の『アサヒグラフ』(3 月 15 日号) に記された塔には設置されていることから、塔の完成時には未完であったといえる。1957 年に設置されたひめゆりの塔の造形は付随する献花台や柵の設置などはみられるが、その造形的な変化は見られない。1973 年に塔の前に設置された献花台にはかつての両校の徽章が刻まれているが、これはひめゆり部隊のかつての美術教師であった画家大嶺政寛によるものである。

○他の慰霊碑の造形と美術家の関与

玉那覇正吉は、1950 年に首里にあった沖縄県立第一中学の戦没者をまつる慰霊碑、一中健児の塔のためセメント製の等身大男子学徒像を制作する。同像は、左足を組んで膝の上に両手を組み、僅かに上方に目線を投げかける像となっていた。1954 年に玉那覇はその対となるセメント像を制作し同慰霊碑の脇に設置した。しかし、1970 年に山城善三が著した『慰霊塔案内』に掲載されている一中健児の塔は両像ともに失われている。その後、1979 年に同塔は現在の場所に改修のうえ移転されたという。2002 年には戦没者の名を刻んだ碑が設置され、2012 年に玉那覇が 1950 年に制作した学徒像が再現設置されたが、当初の像とは素材や造形に違いが生じている。沖縄県立師範学校の学徒を祀る健児の塔は 1950 年に設置されたが、4 年後の 1954 年に師範健児の像が追加されることとなった。同像は外間守善、大田昌秀、安村昌享らの記した『沖縄健児隊』が映画化され、その上映権によって得た資金で制作されたもので、像は彫刻家野田惟恵によるものである。3 体からなるブロンズ像は平和・友愛・師弟愛を表しており、台座はピラミッド形をしているが、これは玉那覇のひめゆりの乙女像が台風で倒壊したことを受け、どの方面からの風を受けても倒壊しないような設計となっている。

上述した慰霊碑の他にも沖縄県南部には各都道府県によって建立された慰霊碑や、現地で戦闘を行った部隊毎の慰霊碑が建ち並んでいる。その多くは、1960 年代に各県によって競うように建立されたため、「慰霊塔団地」と呼ばれることもある。これらの慰霊碑のデザインは共通する一定の特徴を持つが、それを分類して各慰霊碑を紹介してみるとおおよそ以下のような造形的特徴をもつことが分かる。

【球体型】
北霊碑（北海道 1954 年)、火乃国之塔（熊本件 1963 年)、茨城の塔（茨城 1964 年）
【タワー型】
黒百合の塔（石川県 1962 年)、房総の塔（千葉県 1965 年)、立山の塔（富山県 1965 年)、岐阜の塔（岐阜県 1966 年)、甲斐之塔（山梨県 1966 年)、浄魂之塔（沖縄遺族連合会 1957 年、1967 年に現在の形になる）万朶の塔（沖縄遺族連合会 1968 年）
【墳墓型】
逓魂之塔（逓信職員 1965 年)、栃木の塔（栃木県 1966 年)、ブーゲンビル島戦没者勇士之碑（同島遺族会復員戦友会 1966 年）
【アーチ型】
ふくしまの塔（福島県 1966 年)、島根の塔（島根県 1969 年)、しずたまの碑（沖縄遺族連合会 1969 年）
【自然石型】
みちのくの塔（青森県 1964 年)、信濃之塔（長野県 1964 年)、徳島の塔（徳島県 1965 年)、ひむかいの塔（宮崎県 1965 年)、鎮魂長崎の碑（長崎県 1966 年）はがくれの塔（佐賀県 1966 年)、土佐の塔（高知県 1966 年）宮城之塔（宮城県 1968 年）
【祭壇型】
のじぎくの塔（兵庫県 1964 年)、神奈川の塔（神奈川県 1965 年)、なにわの塔（大阪府 1965 年)、福岡の慰霊の塔（福岡県 1966 年）静岡の塔（静岡県 1966 年）
【構造物型】
防長英霊の塔（山口県 1966 年)、埼玉の塔（埼玉県 1966 年)、福井之塔（福井県 1966 年)、ひろしまの塔（広島県 1968 年)、讃岐の奉公塔（香川県 1968 年)、平和の塔（沖縄県遺族連合会 1952 年 1969 年に現在の形態となる)、大和の塔（奈良県 1967 年)、開南健児の塔（開南中学同窓会 1971 年）

上述の分類は碑の造形的な面から分類したものであるが、多くの碑に共通するのは各地域から持ち込まれた石材を利用している点があげられる。自然石を使用した慰霊碑はもちろんであるが、それ以外の慰霊碑にもこうした傾向が伺える。

球体型の慰霊碑については茨城の塔の球体にかんして上述の山城善三の『慰霊塔案内』には「戦没者の功績を表彰するとともに、平和をもたらすというアイデアである」とも記されている。また、熊本の火乃国の塔の碑文に「世界平和を祈念しそのみたまをお慰め申上げるために（略）この碑を建てる」「戦没将兵のご偉勲を顕彰しみたま安かれと祈る」とも記されていることから、
戦没将兵の偉勲やみたまそのものを象徴的にあわらしているものだといえよう。

タワー型の慰霊碑は、山岳地帯を持つ県に多く見られるのが特徴であるが、房総の塔や岡山の塔のように合掌する手のひらを造形化した型の慰霊碑も見受けられる。また、房総の塔には塔下部に 1993 に球体が配置されるが、甲斐之塔や万朶の塔にもタワー下部に球体が配されており、二つの形式を備えるようなデザインが取り入れられている碑もみられる。

墳墓型の慰霊碑は、沖縄の伝統的な亀甲墓や破風墓のデザインを踏襲したもので、ブーゲンビル島戦没者勇士之塔はソ

ロモン諸島での沖縄出身戦死者の遺骨が納められ、実際に墓としての機能を持っている。栃木の塔の碑文には「建立にあたっては、陶芸家故浜田庄司先生を始め県建築士会および現地の方々の御指導を受けた」と記されている。上述した河合寛次郎の「戦跡に想う」で語ったように、浜田もまた沖縄の伝統的な墳墓のデザインを慰霊碑に取り入れているのは興味深い。

アーチ型の慰霊碑の数はそう多く見られないが、数点は確認出来る。島根の塔は広島の原爆慰霊碑の造形と類似しているようにみえるが、そのデザインは「出雲の民家ワラブキ屋根」から着想を得たという（山城善三『慰霊塔案内』）。

自然石型の慰霊碑は、慰霊碑の中で数多く確認できる様式である。各地域からもたらされた石材を加工せずに碑名を彫り込んだ形態のものが多い。また、徳島の塔にみられるように主塔の周りに徳島県内の各市町村から集められた小さな石材を配置した慰霊碑も見受けられる。

祭壇型の慰霊碑は、敷地面積が広い比較的大規模な慰霊碑に見られ、階段が設置された広い基盤の上に立方体の碑が設置されることが多く見受けられる。

構造物型の慰霊碑はそれぞれ独特の形態を持つものが多いが、防長周防の塔は神社の建築にみられる千木、鰹木のデザインと正倉院の校倉作りをモチーフとしている。埼玉の塔は白い背景をもつ壁面を後景にもち、小石が配された土台に鉄製の植物のような形態がうねるように立っているの。こうした造形は他の慰霊碑にはみられないもので独特の造形だといえる。讃岐の奉公塔は香川県の民話として知られる「奉公さん」をモチーフにしたもので、奉公先の姫の病気をもらい受け命を落とした伝説の少女を具象化したものである。同塔は徳島の塔と同様、香川県内の各地の石材が「奉公さん」の周りを取り囲んでいる。大和の塔は法隆寺の百万塔をかたどったデザインが採用されている。ひろしまの塔は同地出身の圓鍔勝三のデザインによるものである。沖縄に伝わる家屋にみられる「ヒンプン」（魔除けの壁）からヒントを得たといわれ、右端に少年少女のブロンズレリーフと左端の上部に穿たれた穴に向かって飛び立つ鳩のブロンズレリーフが配されている。また石碑には鹿や紅葉といった広島を示すモチーフが刻まれている。こうした美術家の慰霊碑への関与は沖縄南部の慰霊碑全てではないが、ある程度判明しており、玉那覇正吉や浜田庄司、圓鍔勝三以外の美術家を列挙すると以下の通りとなる。

【慰霊碑名】	【関与作家】	【種別】	【所属等】
立山の塔	伏木澄生	洋画家	自由美術協会
島根の塔	西田明史	彫刻家	
埼玉の塔	箕口博	彫刻家	二科会、日展
やすらかにの塔	中村晋也	彫刻家	鹿児島大学助教授
開南健児の塔	大城皓也	画家	二科会

これまで、沖縄本島南部に設置されている慰霊碑に関しては、上述の火乃国の塔に見られるような戦死者を英霊として讃える点について疑問をなげかける報告がなされている。例えば靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会による『戦争賛美に異議あり：-沖縄における慰霊塔碑文調査報告-』や真鍋禎男による『沖縄戦跡が語る悲惨』などがあげられよう。こうした碑文に関しての研究と同時に碑の造形に向けられた解釈についても興味深い現象が起きている。上述の圓鍔によるひろしまの塔について山城善三の『慰霊塔案内』では「中央の黒御影石の三本柱は国の御楯となった英霊の柱をあらわし、副体には子供達が太陽に向って永遠の平和を祈り、英霊の魂が金色の鳥となって空高く昇天する情景を表現してある」と解説が付されているが、1985 年に大田昌秀が記した『沖縄戦戦没者を祀る慰霊の塔』では「中央の三本の御影石の柱は、戦死者を意味し、副体には子供達が太陽に向けて永遠の平和を祈り、戦死者の霊が金色の鳥となって昇天する情景を表すという」と述べられ、主塔である三本柱の解釈が異なるものとなっている。慰霊碑自体は言葉を紡ぐことはしないため、ひろしまの塔の三本柱をどのように解釈するかという点については、慰霊碑に携わった作家が持つ造形的な特性や、注文主の意向を丹念に調べる必要があろう。

〇平和と美術－今後の課題として

本研究の当初の予定としては、慰霊碑の造形から原爆のイメージなども射程に入れて、戦後の「平和」の造形全般について研究を行う予定であったが、コロナ渦における海外での調査が出来なかった点やオンライン講義へのシフトなどによるエフォートの低下によって、十分な分析を行うことが出来なかった。本報告で絵画をはじめとする戦後の美術における平和イメージの変遷に対する分析が行えなかったのはかような所以である。しかし、沖縄の慰霊碑、殊にひめゆりの塔の変遷についてはある程度の分析は行えたと自負しており、他の慰霊碑についても一定程度の美術家の関与を明らかにすることができたように思える。また、研究期間を通じて原爆のイメージや「平和」を関する美術展や作品などの調査は行っており、集積した資料はかなりの分量となっている。今後は、本研究補助を受けて蓄積した資料を丁寧に分析し、戦後の「平和」表象がどのようになされ、それを視覚文化の歴史においてどう位置付けるべきかについて明らかにしていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 奥間政作
２．発表標題 ドルと美術
３．学会等名 イーストアングリア大学セインズベリー日本文化研究所主催　国際シンポジウム「沖縄美術と文化：歴史的概観と現実的実践」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 奥間政作
２．発表標題 「ひめゆり」のかたち－慰霊碑を中心に－
３．学会等名 早稲田　表象・メディア論学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関